

## 白河学フィールドワーク 4

### 修学遠足、中世県南と常陸国境

古代、中世の県南地方への人と文物の移入出は阿武隈川や久慈川による水運もあったろうが、古代からの街道によってなされ、下野、常陸の国境に関や塞の神が置かれ、白河の関や大槻関、焼山関が関と境の明神とのセットで知られている。しかし、私達県南に住む人々はあまり大槻という漢字や地名に馴染みが薄く、訪れることも稀である。国道349（茨城街道）を東館から南下して県境の峠へ向かう。道は登り勾配で小田川を遡る。下関河内とか追分などの地名が現れる。黄金色の稲田の刈り取り作業が盛んでこの地域は日干しの稲架が一面に風景を彩っていた。近年コンバインによる作業で各地の秋の実りの風景が変わってきた。先週訪れた西会津や新潟での稲架風景が昔と変わらない景色で心穏やかで来たばかりであったが、塙、矢祭でこんなにも日干しの稲架が続いているのは日干しをブランドとしての販売システムでも完備されているのであろうか。

大槻の旧道には「大槻宿」の標示もあるが整備された国道は直線で一気に峠の県境を越す。茨城に入ってすぐ左手の山中に石の丸柱鳥居を見つけ、車を停める。鳥居からの石段は一部修復されているが古い石が風化され傾き、崩れそうなものもあるが、それがまた古色をいっそう深めている。急な石段の両側には杉、檜、樅が、ぶたくて時間経過を物語る。

「村社境神社」と石柱に刻みこまれている。境の明神が設立されたのは何時なのだろうか。石段上の境内には以外に新しい拝殿があって電気も引かれている。本殿は鞘堂に囲まれ、内部は大変古そうでなかなか立派なものに見える。この時期こうした空間ではスズメバチの被害が多いので気にしていると案の定、我々の周りを数匹のキイロスズメバチがしつこく纏わりついてきたのでそうそうと退却した。白河の関のように男神、女神の二社があるのかと周囲の山を探すも見つからず、先ほどの境内内に二祠があるのだと解った。

帰路にここ数年で有名になった滝川溪谷の入り口で団子を買って地区の老人達に話を聞いた。国土地理院25000分の1図の石碑記号地にはなにもないこと、峠の切り通しも昔は今の路盤よりずっと高かったこと、国鉄水郡線を通すにもここを通すはずであったが久慈川沿いにもっていかれたこと、などを話してくれた。その老人が言う久慈川ルートは焼山関という街道関があった。太子、下野宮で長有の駅家のあった官道である。ここまで白河郡が管理下にあった時代もある。

#### 羽黒山館跡

塙町の道の駅の案内で代官所跡の場所と羽黒山への進入口を聞く。今は狭い代官所跡地に地蔵堂が置かれ住宅街に埋もれていた。徒歩で出羽神社の一の鳥居を写真に撮って街中からの登山口を覗いたが藪でとても登れそうにない。車で竹の内地区からの林道に行く。渋井方面へ出る林道の峠から分かれて狭い急な登りの山道を行き着くと神社があった。拝殿まで登ると脇道の先に山城の見晴らし台のあった広場が開けている。久慈川沿いに広がる田園風景と塙町の町並みを見下ろせる。今は手入れのされていない植林地は杉が混み過ぎて鬱蒼と藪だらけの羽黒山であったが中世山城として造られ、「出羽」の字も山形県とは関

係がなく、鎌倉時代の征夷軍の用いた矢羽からきているそうである。しかし出羽神社の神社紋が屋根にあり日の丸扇が見える。境神社の紋も同じであった。今も佐竹家末裔家では同紋を使用しているらしい。石段の下にある館の想像図からすると羽黒山全山に館としての空間と施設が配置されている。ここはやはり陸奥国の入り口に他ならない。陸奥依上保と八溝鉦山を死守すべく佐竹氏は、赤館、寺山、東館の白川結城や伊達氏と、ここ羽黒山を城郭として戦場の舞台とし、16世紀を戦った。